



日本学術会議 会長

黒川 清



純粋培養育成やめて他流試合を

——米科学誌「サイエンス」に掲載された胚性幹細胞（ES細胞）に関する論文の捏造が大事件になりました。

「代表的な科学誌でも『意図された』捏造論文の掲載を防ぐことは困難でしょう。論文は複数のピア・レビュー（同じ分野の専門家による評価）を受けますが、実験や裏付けのデータは信用性があるという前提で行われています。論文にある『悪意』まで見抜くことは至難です。

——では、どうすればいいのでしょうか。

「科学者の不正に限れば、論文に虚偽があつたらペナルティーを与える第三者機関の設置などの制度も良いでしょう。しかし、その前にすることがいくつもありません。科学者育成の仕組みも大事です。それほど難しいことはありません。まず、大学から教授まで同じ組織で育つ『純粋培養』をやめればよいので

す。大学、大学院、ポストドクなどのそれぞれの段階に移る時は、別の所で研究する『他流試合』にすれば、いろいろな組織の様々な側面が見られる。しかも実力があつて公正な研究者ではないとなかなかよその大学や研究所から声がかからない。これが『ピア（同僚）』形成の基本なのです。自ずとしっかりとした視野の

広いプロの研究者が重用されるようになり、学界ももっとオープンな評価の場になります。つまらない間違いはここで指摘されるでしょう。一方、こうした『混ざる』過程では、質の高い学生や研究者を育てる教授などは、指導者として『ピア』によって高く評価されます。そうすればいい学生や研究者がまたそこに集

これでは落ち着いていい研究ができるとは思えません。それに大学が国際的に開かれていません。大学院は改善されていますが、学部はまだ『鎖国』です。世界の一流大学は世界中の高校生を狙って活動しています。日本の一流大学もこうした国際動向に対応すべきです」

まってくる。公正で、透明性の高い競争的な環境で育つたプロの研究者は、より質の高い研究手法を身につけ、間違いは少なくなるのです」

——第三期科学技術基本計画の投資総額が二五兆円になりました。

「第一期一七兆円、第二期二四兆円が投資され、この一〇年で随分多くの若手研究者は育ち、研究費は潤沢になりました。ただ、この結果を受けて将来何をやるのか、できるかが問われています。

『学』への期待は高まっているのですが、大学側は積極的な発言や行動をしていません。競争的研究資金は従来の日本の大学の序列を反映して東大に一極集中しています。日本では、従来のシステムのまま資金投入を増やせば、こういうことになるのは当然です。さらに、大学法人化で経済的効率化を急ぐあまり、研究費の獲得や研究評価等の仕事量が激増し、大学人、研究者は疲れきっています。

は将来、どうなりますか。

「原子力委員会は二〇三〇年、そして二一〇〇年にも電源の三〇％を原子力と想定しています。それでいいのでしょうか。インシュタインが『E=mc²』を発見してから一〇〇年がたっています。核爆発が巨大なエネルギーを放出することが実験的に示され、広島と長崎に原子爆弾が投下されました。これは世界戦争という状況でマンハッタン計画があつたからです。それから六〇年がたち、日本の電源の三〇％が原子力。インシュタインも予想できなかったと思います。だから一〇〇年後は全く違うエネルギー源が主力になっているかもしれない。人口増加、環境問題、南北格差などを考慮したエネルギーを開発していかなければならない。原子力がない世界も考えなくてはならない。だからこそ基礎研究が大事で、そこへの投資が必要なのです」